

あの日から 1年

7・16庄原 豪雨災害を振り返る

昨年7月16日夕刻、狭い範囲に短時間で降り注いだ猛烈な雨。激しい土石流となって一瞬のうちに一人の命と多くの財産を奪いました。あれからもうすぐ1年が経とうとしています。今年も梅雨に入り、雨による土砂災害などの危険性が高まってきます。今月は、昨年の豪雨災害を振り返り、災害対策、防災について改めて考えたいと思います。

01 被災者が語る庄原豪雨

局所的な集中豪雨は、河川の氾濫や土砂崩れなどを引き起こし、人的被害とともに各地で家屋、ライフラインなどに甚大な被害をもたらしました。そのとき被災者が体験したこととは。

突然の水位上昇

当日の朝、家の脇に積まれたブロック擁壁の排水口から、いままで見たとの勢いで水が噴き出していました。近くを流れる川の水もどす黒い色をしていましたが、3日くらい前に降った大雨の影響だろうと聞いていました。

その日は、妻と二人で自宅にいました。午後3時半ごろから少し雨が降り出したので、家のすぐ横を流れる大戸川の水位を気にして見ていました。午後4時ごろになって雨が大雨りになり、川の水量次第が増えてきましたが、まだバケツの水をひっくり返すほどの豪雨ではありませんでした。しかし、午後5時ごろになると川の水位も急激に上がり今にも氾濫しそうな状況になったため、急いで乗用車を約150メートル先の市道に移動させました。それでもなお危険だと感じたので、より安全な場所まで移動させました。続いて軽トラックを移動させようと、歩いて自宅まで帰ったところ、自宅前はすでに長靴の上から水が入るほど水位が上昇していました。軽トラックはどうしようもないとあきらめ、取るもの取りあ

えず、妻と二階に急いで乗用車まで避難しました。

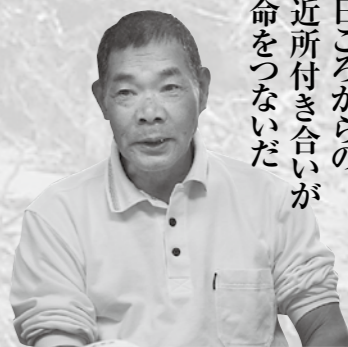
その後、大戸川の上流から、車や立木などが流れてきました。午後6時半ごろ、隣家の近くから自宅の様子を見たときには、すでに自宅の3分の1くらいが流れていました。このころが出水のピークだったようで、そのときには雨は止んでいました。

地域住民の絆

避難所となっている高小学校へ向かうためには、西城川の上流と下流に架かる2つの橋のうちどちらかを渡る必要がありました。私たちは、大戸川から上方面へ避難していたため上流に架かる「竹の下橋」を渡って避難することにしました。後になってわかりましたが、もし下流の橋を渡っていたら土石流で前後をふさがれ、孤立していたかもしれません。

幸いにも、私の住む地域内では全員無事に避難することができました。このことは、進んだ経路がたまたま良かったこととありますが、普段から地域で交流し家庭の状況もお互いにかつていて、声の掛け合いや助け合いが

日ごろからの近所付き合いが命をつないだ



なかま よしお 中間 芳夫さん 63歳 (川西町) (現在:板橋町居住)

できたことが一番です。近所には、家族が外出中で1人自宅に残されていた高齢の方が、近所の人に声をかけられ、車で一緒に避難され無事だったということもありました。日ごろの近所付き合いが、命さえ守る強い絆になると改めて強く感じたところです。

普段の心掛けが何より大切

避難時には夫婦二人、お互い普段持っている小さいかばんだけを持って逃げました。通帳や印鑑などの貴重品は持ち出すことができず、すべて流れてしまいました。日ごろから、非常時に持ち出す物を決めてついにまとめておくなど普段の心掛けが何より大切だと改めて強く思います。

天変地異の前ぶれ

当日は朝から雨が降っていました。午前中はネギを植え付けているハウス内で作業をし、午後は自宅で休んでいました。午後2時過ぎごろ、時折日も差していた空が一変して暗雲が広がり始め、雷がとどろき電が降り始めました。直径が2センチほどもあり今まで見たこともない大きさでした。降り方もとても激しく、辺り一面がみるみる真っ白になっていきました。雨も強く降り続いていました。不安で外の様子を見てみると、奥の畜産団地方面や家の裏から泥水が激しく流れ出し、住宅に押し寄せてきました。

避難のきっかけは一本の電話

午後4時過ぎごろに息子の妻が豪雨の中、川北を通って帰宅してきました。道中はワイパーがまったく役に立たず大変だったとぐったりしていました。すると4時半ごろに裏山が崩れました。そのころに息子から「危険なのですぐに避難したほうがいい」と電話があり、まもなく外から「早く逃げろ!!」と大声が聞こえました。妻と小学生の孫は、手当たり次第に身の回りの物をリュックに詰め込み、雨の止め間をぬって下の藤岡さん宅へ避難しました。私も躊躇うと家を出しましたが、母

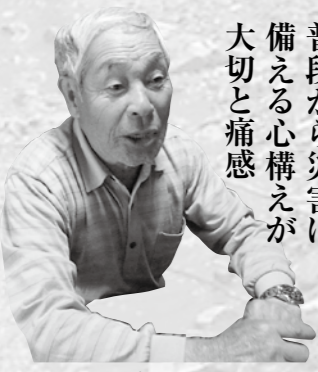
安全神話の崩壊

今回の災害を経験して感じることは、住宅の建つ場所が絶対安全だとい

屋に隣接する離れが倒壊し道をふさいで通れないため、反対方向のやぶの中を通りやつとの思いで藤岡さん宅へ避難しました。もう一人いる中学生の孫は下校する前だったため、そのまま西城市街地の親戚宅に避難し無事でした。

その後、避難所となっていた西城公民館に身を寄せましたが、妻は着いてしばらくは足がすくんでいました。裏を流れる川の音が雨の音に聞こえ、3日くらいは寝ることができなかったようです。被害状況を伝えるテレビも見たくない気持ちでした。8日間の避難所生活でしたが、担当者の方々にとてもよくしていただきました。

普段から災害に備える心構えが大切と痛感



せ お とよあき 瀬尾 豊秋さん 74歳 (西城町大屋)

うところは無いということですが、何十年も同じ家に住み、今まで一度も被害が起ったことがなく、自然の災害はいつどのようなことで起こるか予測がつかないということです。普段から災害に備える心構えをしておくことが大切だということも感じました。私たち家族が今こうして無事でいられるのは、息子が「逃げる」と電話を早くにかけてくれたこと、藤岡さんが声を掛けてくださったことにほかなりません。

あれから1年が経ちますが、元のようには家族全員で自宅に住むには家を増築しなければならず、なかなか生活再建のめどは立ちません。ネギ作りを再開したいとは思っていますが、今もハウスの中に土砂がたまっていたままで、機械もすべて使えなくなっていました。高齢でもあり将来は不安な思いもあります。高年齢でもあり将来は不安な思いもありませんが、やさしい家族と地域との絆を支えに頑張っていきたいと思っています。

救出・救援に全力を挙げる

市役所に次々と被災状況が飛び込んできました。市はすぐに災害対策本部を設置。滝口季彦市長は自衛隊など各機関へ緊急支援を要請しました。そのときの支援活動について、陸上自衛隊と備北地区消防組合に聞きました。

時間との戦い

支援要請を受け、まず救援活動の拠点となる場所の確保を市に求めました。夜間でも救助に向かうことを想定し、資材を分けたり、人員を把握したりするのに、できるだけ大きな照明があり、面積が広く、大型車両が通れる場所をお願いしました。前進経路に

迷って時間を無駄に消費してしまわないため、庄原インターチェンジから現地までの誘導をお願いし、順次適切に対応いただきました。

72時間※という救助の目安となる時間がある中、派遣命令を受けてから1時間30分程度で連隊長とともに到着し、その足で夜の11時ごろに市長室に入り状況把握を行いました。この早

連絡の速さとの確かな判断がスムーズな救援活動につながる



災害時は
最悪を想定して
まず避難を

陸上自衛隊第13旅団
第46普通科連隊 本部管理中隊長
はなだ みのる
花田 稔 1等陸尉

昭和55年4月に自衛隊入隊
第46普通科連隊小銃小隊長、同連隊運用訓練幹部などを経て、昨年8月に本部管理中隊長に就任。庄原豪雨災害では、災害対策本部で現地隊との連絡調整にあたる。
昭和36年生まれ。49歳。江田島市出身。



行方不明者を捜索する自衛隊員

い段階で市長と連隊長のトップ同士で話ができただけだが、初動としてとても大きかったと思います。

初めての経験とは思えない対応レベル

現地対策本部の対応レベルの高さ、連携の良さはとても初めて経験されたとは思いませんでした。今回の被災者救助のポイント、情報を三元化したこと、各機関の責任区分を明確にしたこと、現地の出入り口を二つにし、出る人と入る人をチェックできるように対応したことなどが上げられます。当初、複数の情報を得ており、その情報には差がありました。しかし、その情報を対策本部が一つにまとめて流したことで、警察も消防も自衛隊も同じ地図を使い孤立状況や活動状況を把握することができました。地図を塗りつぶしながら、各機関が協力し捜索、救援活動を行いました。それにより、夜明けまでに孤立者の安否とその場の状況を確認し報告することができました。

他の地域の災害との違い

庄原市の特徴として、谷あい一本道が多いというのが上げられます。災害が起こった場合は、ヘリコプターで向かうか歩いて山越えをするしかありません。歩いて現地へ行くことは可能

過去の経験にとらわれない
発想を



備北地区消防組合
消防本部
たまおか ひでとし
玉岡 秀利 消防司令長

昭和54年1月に三次消防署に採用
平成21年4月から本年3月末まで庄原消防署署長。庄原豪雨災害では、災害対策本部で被災者の救援を指揮。本年4月から備北地区消防組合消防本部予防課長。
昭和33年生まれ。55歳。三次市出身。



崩壊した道路を突き進む隊員

被災・避難状況のすばやい把握が事後の対応につながる

つかめない情報

三次での会議中にその二報が入りました。庄原の一部地域で池や小河川などが氾濫、道路で車が立ち往生し、救助要請が来ているというものでした。

消防本部は、非番職員などの召集、三次署や東城署からの増隊、体制の充実強化を図っていましたが、十分な情報がかめなため隊をどこに増強投入するべきか、どういう隊を要求され

地域とのつながりの強さに驚き

災害対策本部に行くと驚きました。

それは、被災状況や孤立情報など私たちが得られなかった情報がすでに集まっていたこと。市の職員や消防団員の皆さんが持つ地域とのネットワークのすごさを感じました。地域でのコミュニティ、人間関係、対策本部と地

ているのか対応に苦慮していました。

判断と対応の早さ

早い段階での災害派遣支援要請はとてもすばらしかったと思います。深夜のうちに自衛隊の先遣隊、消防や警察も到着し、保健師を待機させ、補給の方法や進入の経路、待機場所などほぼ準備ができていました。

あわせて、消防団員の方々の活動もすばらしいものがあつたと思います。災害発生直後、消防団活動に入る前にお互いの救助や支援などをした上で、切れ目なしに団員として支援に入られました。残念ながら1人の方がお亡くなりになった状態で発見されましたが、連日にわたり泥まみれ汗まみれになりながら捜索活動を続けていただき、皆さんのご協力があつて発見できたのだと思います。自分の身の危険を顧みず、過酷な条件の中の活動にとても感謝しています。

過去の経験にとらわれない

高齢になるほど過去の経験に縛られてしまう方が多いですが、残念ながら今まで経験していない災害が起き

ですが、被災直後の川沿いは特に危険です。周辺まで車で行く際にも、現地で車がUターンすることができず行き詰まってしまうかもしれません。これを想定して進入する時間を決め統制したつもりでしたが、早くたどり着きたいという気持ちと、運転手にそれが徹底されていないことも要因でした。仕方なく途中から歩いていきましたが、それだけで1時間から1時間半くらい遅れ、重機の投入も遅れてしまったことが反省点です。

とにかくまず逃げろ

東日本大震災の津波もそうですが、危機管理は一番危険な状況を想定して対応しないといけません。とにかくまず逃げるのが大事です。これが鉄則です。避難勧告の是非が論じられませんが、避難勧告の判断はとても難しいため、最終的には個々での判断が求められます。それは、市街地でもどこに住んでいても一緒です。とにかく命を守る。そこは誰もが教訓にしなければいけないところだと思います。

※72時間とは

災害で生き埋めになった被災者の生存は72時間が限界といわれています。その間、公的機関の全力が人命救助にあてられます。災害が起こった後の72時間は、「自力で災害に立ち向かわなければならぬ時間」です。



環境になりつつあります。過去のイメージだけでなく「起きるかもしれない」という発想に切り替えることが必要だと思っています。昔と比べ、気象や地勢も変わっています。人の手が加わり思わぬ危険が潜んでいるところが増えているように思います。

地域で防災訓練を

災害から身を守るためには「訓練」が最も有効です。実践に勝るものはありません。逃げることは、自分がその気になって動かないと避難行動になっていきません。それを後押しするのは、近所の人の声かけではないでしょうか。避難場所の確認、連絡の取り方や情報を流す方法を考えるなど、自分たちの地域に合った防災訓練をみんな考えながらぜひ実施してもらいたいと思います。

備北地区消防組合

庄原市豪雨災害時の対応状況
(7月16~23日)

- ◆活動隊員数:延べ287人
- ◆車両数:42両

陸上自衛隊第13旅団

庄原市豪雨災害時の部隊派遣状況
(7月16~19日)

- ◆活動隊員数:延べ388人
- ◆後方支援を含む隊員数:延べ757人
- ◆車両数:92両
- ◆航空機(ヘリコプター):4機

自助・共助・公助の役割

災害に負けないためには何が必要でしょうか。災害に立ち向かい力を発揮した庄原市消防団と北自治振興区から学びます。

各関係機関とともに搜索活動に尽力

われわれ消防団は、市から災害発生の連絡を受けると同時に、被災住民の安否の確認と避難誘導を行うために、地元団員を現地向かわせました。地域内の道路は寸断され、河川は氾濫し、しかも深夜に及ぶ非常に危険な状況での出動でしたが、団員は安全にそして迅速に各戸を回り、安否の確認や避難の誘導にあたりました。そして、災害対策本部設置から約7時間後の



庄原市消防団 上原 清司 団長 59歳
（川北町）



搜索活動に集まった団員

7月17日午前0時45分、1人を除いて全員の安全が確認されました。その後、夜明けを待ち、自衛隊や警察、常備消防とともに行方不明者の搜索活動にあたりました。残念ながら搜索者の発見に至りませんでした。被災者住宅から流出したと思われる位牌家族写真、賞状などを発見し、所有者の元へ届けることができました。また、被災地の方面隊は、全国から駆け付けてくれたボランティアの皆さんと共に、被災住宅の土砂の撤去作業に汗を流しました。

地元精通し住民の安全確保に力を発揮

自主防災の近道はみんな支え合う 絆のある地域づくり

区の関係部長はすでに被災者支援の準備に取りかかっていました。翌日には「災害被災者支援対策本部」を設置し、自治振興区の既存の専門部を5つに分けた各支援班が、それぞれの役割に応じて被災者支援にあたりました。

近年、災害に地域で備えるための組織づくりとして「自主防災組織」の必要性がよく言われます。私たち北自治振興区には自主防災組織という名前の、特別な枠を持たせた組織はありません。平時、防災や防犯に関することは、12ある専門部のうちの二つである「防災・防犯部」が中心となって取り組んでいます。しかしながら、とりわけ今回のような大規模災害では、直接住民の生命財産を守ることにつながることから、一つの部署を超えた自治振興区すべての機能を結集させ、復旧や支援活動に取り組む必要があります。

日ごろの取り組みが災害対応を可能にした

けれどもそのことは、自治振興区の役員が技量だけですぐに行動に移せるものではなく、ある日から急にできるようになるものでもありません。自

地域に暮らし地域を熟知する 団員

この災害は、われわれ消防団の使命について改めて考える契機になりました。

消防団の特性は、市内全域をカバーする1700人余りの団員の動員力に加え、他のどの公的機関よりも地元精通しているということです。暗闇と降雨の中、各戸を訪問しての安否確認や避難経路の選択と誘導、正確な現場位置情報の伝達などが可能だったのは、その地域に暮らし、河川、道路、水路、家屋の位置、そして被災家庭の家族構成や勤務先までも熟知している消防団員ならではの強みです。

公的な機関として、行政や警察、常備消防と並び、いわゆる「公助」の二翼を担っている消防団ですが、地域住民として社会生活を営むわたしたちは、自らの地域は自ら守るという「共助」の精神をその礎として、日々活動することが必要です。消防団員として何ができるか、何をすべきか、災害発生時の緊急対応だけでなく日常の啓発活動も含め、いまだ消防団の精神・任務の原点に立ち返って見つめ直す契機にしたいと思えます。また、他の公的機関との連携を強め、より団の機能を発揮できる体制を整えていくことが重要だと考えています。

安定的な団員の確保と体制づくりが必要

消防団の特長である地域密着性と動員力を維持機能させるためには、安定的な団員の確保が第一です。しかしながら近年入団者も減ってきており、地域によっては定数に満たないところも出てくる状況です。市民の皆さんには消防団活動にご理解をいただき、住民に最も身近な消防防災機関として本来の機能が十分に発揮できる体制づくりにご支援いただきたいと思えます。われわれ消防団も、市民の付託に応えるよう、今回の経験を活かしながら、地域住民の安全・安心なまちづくりに引き続き貢献していきたいと思えます。

庄原市消防団員を募集しています

市内在住か市内に勤務する18歳以上であれば、誰でも消防団に入れます。あなたの入団をお待ちしています。庄原市消防団および入団に関することは、危機管理課(☎0824-73-1206)または各支所自治振興係へ問い合わせください。



北自治振興区(川北町)

左から、高橋事務局長、大迫区長、住田顧問(前区長)、佐藤副区長、清水副区長

災害被災者支援対策本部を設置し対応

当時自治振興区の区長だった私のところへ区内の非常事態を知らせる電話があったのは、7月16日の午後5時過ぎでした。状況報告を受け私が自治振興センターへ駆けつけたとき、振興



災害・被災者支援対策本部会議



広報部を中心に情報収集



給食班による炊き出し支援

治振興区内のすべての部と自治会住民が力と知恵を出し合って高め合い、支え合う地域づくりに、日ごろから取り組んでいけばこそ可能になることだと思っています。こうしたコミュニティ醸成の取り組みが根底にないと、いざ有事があっても、振興区の各組織や地域内の人材も、一部の役員の空回りばかりで機能せず、結局住民のためにもなりません。

住民がお互いを思いやり、絆のある地域をつくっていくこと。これが自主防災の一番の近道であり、一番大切なことだと考えています。自主防災組織の名

前はあっても、中身がなければいざというとき住民の命を守ることはできません。

北自治振興区では昨年の災害を経験し、危険箇所がどこにあるか、避難経路はどこが適切かなど、地域内を知ることの大切さを改めて感じました。みんなで見直しを出し合いながら新たに「防災マップ」などの作成にも取り組んでみたいと考えています。また、市や社会福祉協議会などの関係機関とも常に連携し、情報の収集や自治意識の高揚に努めていきたいと思っています。

担当課に聞く

市は、危機管理体制の強化を図るため、危機管理課を4月から設置。庄原豪雨災害を経験した教訓を生かし、人的被害を未然に防ぐ取り組みを進めます。



危機管理課 しみず たかきよ 課長
清水 孝清

ど残っていないかたり、支援物資を届けようとしても道路が崩落し避難所までたどり着けないケースも想定できま

『自助』『共助』『公助』のバランスを保つ

被害が大きくなるほど行政の対応力は小さくなる

昨年豪雨災害は極めて限られた地域で起きたため、市は本庁・全支所挙げての支援態勢をとり、被災地域での復旧支援業務へ従事させることができました。消防団も地元分団の早急の出動はもとより、市内の全方面隊へ出動要請を行い、不明者の捜索など集中的に従事していただきました。しかし、もしこの被害が市内全域に及んだとしたらどうでしょうか？市民の方からの要請に対応できる人員がほとん

ど残っていないかたり、支援物資を届けようとしても道路が崩落し避難所までたどり着けないケースも想定できま

情報収集機能の充実を図る

土石流を前に人間が盾となつてその流れを止めることは不可能ですが、災害によつて発生する人的被害を最小限に抑えることは可能です。市は、昨年の豪雨災害を検証する中で、本年度、事前に豪雨などを予測するためのデータの取得、雨量計測システムなど情報収集機能を充実させる予定です。それらのデータを基準とする避難基準の見直しも行っていきます。より早く正確な情報に基づいた住民の行動指針を定め、未然に人的被害を防ぐことができるよう諸条件の整備を行っていきます。

出前トークをご利用ください

市の職員が直接出向いて市の施策などを説明する「出前トーク」では、防災・安全に関するメニューも取り揃えています。今年、そのメニューの申し込みがすでに前年を上回っており、市民の皆さんの関心の高さがうかがえます。メニュー内容をご相談に応じますので、より一層のご利用をお待ちしています。

■問い合わせ
情報政策課広報広聴係 ☎0824-73-1159

農地・農業用施設を 災害から守りましょ

農地などの災害を未然に防ぐために

市内には古いため池も多く、新たに災害が発生する危険性があります。災害を未然に防ぐために、次のことに十分注意しましょう。

- ①ため池の堤体に草木が茂っていると、堤体のひび割れや漏水が見つけにくくなります。また、草木の根が地盤をゆるめて決壊の原因になることがあります。梅雨前に立木や雑草は刈り取っておきましょう。
- ②ため池の洪水吐や放水路にゴミや土砂などが流れ込んでいたら、それらを取り除きましょう。また貯水量を増大させる目的で、土のうなどを積みあげている場合は、これを取り除いておきましょう。（土のうなどを取り除いていない場合、人的行為によるものと判断さ

れる可能性があります。その場合は災害が発生しても復旧事業の対象となりません。

③事前に、ため池の堤体に陥没やひび割れ、漏水、湿つて柔らかくなった箇所がないかを点検しましょう。もし

災害が発生した場合

異常があった場合は、速やかに連絡をお願いします。
④井せきの洪水吐で角落とし方式のものは洪水時に操作できないので、大雨などの予報がでたら速やかに取り除いておきましょう。

農地・農業施設の災害復旧の対象

現在耕作されている農地(田・畑)、ため池、頭首工、用排水路、農道など

災害の対象となる条件

- ◆24時間雨量80mm以上
- ◆時間雨量20mm以上
- ◆1カ所の工事の費用が40万円以上のもの
- ◆農業用施設は利用者(関係者)が2戸以上のもの
- ◆被災した農地・農業用施設が、日頃から適正に管理されている事が証明できること(日誌・写真など)

地元の分担金

- ◆農地 復旧事業費の4%
- ◆農業用施設 復旧事業費の2% (激甚災害に指定された場合は、分担金率が2分の1になります)

災害発生時の連絡先

農村整備課耕地係
☎0824-73-1136
または各支所環境建設室・産業建設室へご連絡ください。
※被災された場合は、早急にご連絡ください。



気象情報をチェック!

●大雨情報に注意し収集を

大雨が予想され実際に降り始めたら、常にニュースや気象情報、行政からの情報に気を配りましょう。

■自分で情報を集めるには

インターネットなどを利用して、災害情報を収集することができます。自ら情報を収集し、危険を感じたときには自主的に避難してください。

降雨量・河川水位情報の入手先

機関	通信媒体	URL・電話番号	概要
広島県「防災Web」	インターネット	http://www.bousai.pref.hiroshima.jp/	・市内の雨量計および水位計の観測値(10分値のリアルタイム表示) ・気象注意報 ・警報の発表情報
	携帯電話	http://www.bousai.pref.hiroshima.jp/i/	
国土交通省「川の防災情報」	インターネット	http://www.river.go.jp/	・気象注意報・警報 ・レーダ雨量および降雨予測など
	携帯電話	http://i.river.go.jp/	
気象庁 広島地方気象台	インターネット	http://www.jma.go.jp/ http://www.jma-net.go.jp/hiroshima/	気象情報・洪水予報、雨量・水位情報、土砂災害警戒情報のメール配信
	メール	http://www.bousai-mail.pref.hiroshima.lg.jp/	
広島県雨量情報提供サービス	電話	0824-72-0296【庄原地区】	自動音声再生による管内の雨量情報の提供



携帯電話のカメラ(2次元バーコードリーダー)で、このQRコードを読み取ると、簡単に「広島県防災Web」への登録ができます。



大雨に関する情報(1時間雨量)

やや強い雨	強い雨	激しい雨	非常に激しい雨	猛烈な雨
<ul style="list-style-type: none"> ・ザーザーと降る ・家のまわりなどが水たまりになる ・家の壁や屋根が濡れ始める <p>▲この程度の雨でも長く降り続く場合には注意が必要です</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どしゃ降り ・傘をさしていても体がぬれる ・家のまわりの側溝や小河川があふれる <p>▲小規模なけがれ崩れがおき始めますので注意しましょう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バケツをひっくりかえしたように降る ・がけ崩れや山崩れがおきやすくなる ・道路が川のようになる <p>▲がけ崩れや山崩れの危険地域では避難準備が必要です</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・滝のように降る(ゴーゴーと降り続く) ・水しぶきで、白くもって見える ・土石流がおこりやすくなる <p>▲多くの災害が発生しますので避難が必要となる場合があります</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・息苦しくなるような圧迫感があり、恐怖を感じる <p>▲大規模な災害の発生するおそれが強く、厳重な警戒が必要です</p>
10~20mm	20~30mm	30~50mm	50~80mm	80mm以上

■注意報・警報などの発表基準

大雨が予想される場合、あるいは実際に降っている場合に、つぎのようなものが発表されます。	40mm以上	70mm以上	110mm以上
※必ずしもこの順序で発表されるものとは限りません。 ※平成22年5月27日からの基準	大雨注意報	大雨警報	記録的短時間大雨情報
		土砂災害警戒情報	

●避難場所をチェック!

避難場所を知っておくことも重要です。市内の避難場所一覧を市ホームページに掲載していますので、自分の地域の避難場所をしっかりと確認しておきましょう。
<http://www.city.shobara.hiroshima.jp/>

トップページ → 暮らしの便利帳 → 防犯・防災 → 避難場所一覧

備えあれば、憂いなし

●非常持ち出し品を準備

災害が起きて3日間は公助の手は届かないといわれます。救助されるまで、自分で耐えしのげるよう、普段からの備えがとて重要になってきます。いざというときに持ち出せる品を、さっそく準備しておきましょう。



非常持ち出し品をチェック!

●家族構成にあわせて必要最小限なものを準備しましょう。

○食料品など <input type="checkbox"/> 飲料水 <input type="checkbox"/> 乾パン <input type="checkbox"/> 缶詰 <input type="checkbox"/> レトルト食品 <input type="checkbox"/> チョコレート	○必需品・貴重品 <input type="checkbox"/> 現金 <input type="checkbox"/> 預金通帳 <input type="checkbox"/> 印鑑 <input type="checkbox"/> 運転免許証 <input type="checkbox"/> 健康保険証 <input type="checkbox"/> 車や家の予備鍵	○衣類など <input type="checkbox"/> 上着・下着 <input type="checkbox"/> タオル <input type="checkbox"/> 毛布 <input type="checkbox"/> 寝袋	○生活用品 <input type="checkbox"/> 軍手・手袋 <input type="checkbox"/> 懐中電灯 <input type="checkbox"/> ローソク <input type="checkbox"/> マッチ・ライター <input type="checkbox"/> ロープ <input type="checkbox"/> ちり紙 <input type="checkbox"/> めがね <input type="checkbox"/> 携帯ラジオ <input type="checkbox"/> 生理用品 <input type="checkbox"/> 筆記用具
○医薬品 <input type="checkbox"/> 常備薬 <input type="checkbox"/> 救急セット	○あると便利なもの <input type="checkbox"/> ウエットティッシュ 水がないときに体をふくことができます。 <input type="checkbox"/> ポリ袋 物の持ち運びや、頭からかぶると雨具の代用にもなります。 <input type="checkbox"/> ラップ 食器の上に敷いて使うと、食器を洗わずに済みます。水の節約にもなり、けがの応急処置にも役立ちます。 <input type="checkbox"/> 万能ばさみ はさみ、ナイフ、缶切り、栓抜きなど多機能付きのものがあれば便利です。	○その他 <input type="checkbox"/> カップ <input type="checkbox"/> 防災ずきん <input type="checkbox"/> ヘルメット <input type="checkbox"/> 簡易トイレ <input type="checkbox"/> 携帯電話の充電器	

これらの品は、非常持ち出し袋に入れ、いざというときにすばやく持ち出せる所に置いてきましょう。

消費期限は
こまかく
チェック
しましょう!

非常持ち出し袋の重さの目安
男性 15 kg 女性 10 kg
両手が自由に使える背負いやすいリュック
サックがおすすめです。

